

## 要 報

## 地震古記録慣用における一つの誤り\*

荒川 秀俊\*\*

550.342

日本は地震国として世界でも名高く、また地震の古記録もよく収集刊行されている<sup>(1)(2)</sup>。これらの古記録はまた、地震学そのもののよい参考資料となっている。私は日本地震学界における古記録の用い方に一つの注意を与えて見たいと思う。

現在広く利用されている地震学の教科書ないし読物は、松沢武雄教授<sup>(3)</sup>、坪井忠二教授<sup>(4)</sup>、中村左衛門太郎教授<sup>(5)</sup>、本多弘吉教授<sup>(6)</sup>らの著書である。これらの著書には必ず安政元年11月4日5日の大地震のことが載っていて、安政の大地震というふうにも表現されている。しかし安政の大地震というものは逆説的にいえば存在しなかったのである。この二度の大地震は嘉永7年11月4、5日におこったものであって、この有史以来空前ともいわれる大震災のため、同年11月27日安政と改元したものである。したがって、1854年12月23、24日(西暦)の日本の大震災は存在し、嘉永7年11月4、5日の大地震はあったが、安政元年11月4、5日の大地震というのは、全く不当な言い表わしなのである。

以上のような不当な表現は単に、いわゆる安政の大地震ばかりでなく、他の地震の場合にも見られ、また松沢、坪井両教授らの不注意ばかりでなく、今村博士などによっても慣用されたものであり、大日本地震史料もこの誤りをおかしている。東京天文台編集の理科年表<sup>(7)</sup>、地震の部でも襲用している。自分としては、やはり、不正確な表現はやめるべきでないかと思ひ、この一文を投ずる次第である。

## 参 考 文 献

- 1) 震災予防調査会編：大日本地震史料(明治37年)。
- 2) 震災予防評議会編：増訂大日本地震史料，1-3(昭和16年~18年)。
- 3) 松沢武雄：地震(昭和8年，岩波全書)，地震学(昭和25年，角川書店)。

\* H. Arakawa: A Remark on the Use of Historical Earthquake Records. (Received July 22, 1959).

\*\* 気象研究所

\*\*\* Nagoya L. M. O.: Vibration of Ground Caused by a Dynamo (Received May 11, 1960)

- 4) 坪井忠二：地震の話(昭和16年，岩波新書)。
- 5) 中村左衛門太郎：地震学(昭和29年，内田老鶴圃)。
- 6) 本多弘吉：地震学概要(昭和18年，岩波書店)。
- 7) 東京天文台編：理科年表(16世紀より前の分はユリウス暦とグレゴリオ暦との問題もある)。

## 発動発電機による地面の振動測定について\*\*\*

名古屋地方気象台

550.342

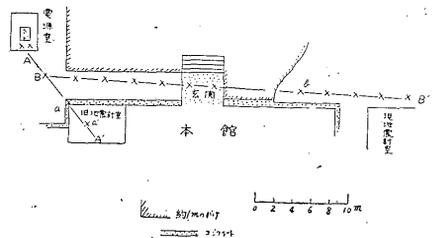
当台においては近く庁舎が新築され、レーダー電源室が新設されるので、発々による地面振動の地震計への影響を調べるため、名古屋大学地震教室に依頼して振動測定を行なったので報告する。

測定期日：昭和35年3月5日

使用器械：電磁地震計(速度を記録するもの)

変換器(HS-1) 周期4.5%/s, 感度0.43V/inch/s  
外部抵抗 500Ω, コイル抵抗 215Ω

記録計 三栄電磁オッシロ直結式  
ガルバー (300 ~ 1 cm/mA, 30 ~ 52 cm/mA)



第 1 図

測定場所：第1図のとおり

## 参考事項

発動発電機 ヤンマー製，防振装置なし，SKV  
エンジンベッド コンクリート深さ120cm，割栗石 深さ30cm。

旧地震計室台 基礎の深さ約2m。

## 測定結果

1. 記録を見ると、電源室床面もふくめ約0.07secの周期で、発々の発火音がとくに上下動に入るほかは、かなり複雑な振動をするが、距離が遠ざかると、0.03secくらいのわりに単純な正弦振動になる。
2. これらの記録を変位に換算し、距離による減衰の